

PHOTO ESSAY

西条キャンパスの自然(植物)

-1-



オミナエシ

女郎花

Patrinia scabiosaeifolia

理学部
分類・生態学講座
◆ 豊原 源太郎



理学部植物園の周りの植生管理を手始めたのは昨年の夏であった。

松枯れと台風による倒木、ノイバラ、フジの蔓等て人をよせつけぬほどに荒れ果てた林の一角を、林床に秋の草花が咲き乱れる林に変えようと考えて、将来の姿をイメージしながら一人黙々と下草を刈払って行った。

その秋、どこで耐えていたのかオミナエシが数本顔を出して、貧弱ながら黄色い花をつけた。上木が茂り、日光が当たらなくなつて葉をのぼすこともできず、数年の間土の下で根茎のまま耐えていたのであろう。

オミナエシは強靱な生命力を秘めた植物であるという知識はあつたが、実際に目前にして感激した。

オミナエシはおみなえし科の多年生草本で、東アジアに広く分布し、日本では秋の七草の一つとして馴染みの深い植物である。

吉備高原では盆花とも呼ばれており、以前にはどこにも見られた。墓参りの途中でキキョウ、オミナエシ、ワレモコウ等を摘んで墓に供えていたものであるが、最近では里山で柴刈や草刈が行われなくなったために、秋の草花が激減して、花屋さんで切花を求めて墓参りするようになってしまった。

昭和三十年代以前の農村を知る者にとって、大変に懐かしい植物ではなからうか。

平安朝の歌人能因法師の歌学書に「をみなえし。女を例えて詠むべし」とあり、黄色い可憐な花が、女性を連想させ「女郎花」とも書かれてきた。

秋の七草は、万葉集に山上憶良が詠んだ「秋の野に 咲きたる花を 指折りかき 数ふれば 七種(ナナクサ)の花 萩の花 尾花 葛花 瞿麦(くばく、なでしこ)の花 女郎花 また藤袴 朝顔の花」の歌に由来し、ハギ、ススキ、クズ、カワラナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウをさす。

なかでもオミナエシは非常に親しまれてきた植物であり、万葉集にはオミナエシを詠んだ歌が十四首ある。後の枕草紙、源氏物語、古今和歌集、芭蕉や一茶の句等、歌や文学、絵画、彫刻などの題材として数多く取り上げられている。

ちなみに、春の七草の方はずっと新しく、鎌倉時代の「河海抄」に出ており、実生活に直結した食草から選ばれたものである。

オミナエシは西条キャンパスの中に増やしたい植物の一つである。気軽に花を摘むことができるほどに繁茂させたいと考えている。

今年の秋、植物園周辺のオミナエシは少し増えて、黄色い花を去年よりも美しく咲かせ始めた。

(とよはら・げんたろう)